

ことばの不思議

歴史言語学

おしながき

言語の変化

言語変化と歴史比較言語学

文法化と文法の起源

言語の変化

これは何語？

Hwæt! Wé Gárdena in géardagum
þéodcyninga þrym gefrúnon
hú ðá æþelingas ellen fremedon
Oft Scyld Scéfig sceapena þréatum
monegum maégþum meodosetla oftéah
egsode Eorle syððan aérest wearð
féasceaft funden hé þæs frófre gebád
wéox under wolcnum weorðmyndum þáh
oð þæt him aéghwylc þára ymbsittendra
ofer hronráde hýran scolde,
gomban gyldan þæt wæs gód cyning.

言語変化の研究

- 歴史的な資料を用いる
- 現在進行中の言語変化を調査する
 - 変化を実際に追跡する
- 見かけ上の時間 (apparent time) に基づいた研究

ら抜き言葉

(佐野 2011)

言葉はなぜ変化するのか

- 新しい事物について話すため
- 言語内的な要因。発音を楽にしたい、覚えきれない活用は単純化したい、言葉を重ねて強調したい、といった力が働く。
- 言語接触。より威信のある言語の影響を受けるなど。

歴史比較言語学

英語とフランス語の比較

英語	フランス語
father	père
fish	poisson
foot	pied
for	pour
few	peu
first	premier

音韻変化

- 言語学で方法論の厳密化が最初に成功した領域
- 「音法則に例外なし」

グリムの法則

- **インド・ヨーロッパ語族**のうち、**ゲルマン諸語**への分岐で生じた音変化の法則
- 現存するゲルマン諸語...英語、ドイツ語、オランダ語、デンマーク語、ノルウェー語、スウェーデン語、アイスランド語など

グリムの法則

- $*b^h > b$, $*d^h > d$, $*g^h > g$
- $*b > p$, $*d > t$, $*g > k$
- $*p > f$, $*t > \theta$, $*k > x$

グリムの法則：例

印欧祖語	英語	ラテン語	派生語が英語に借用された例
*p'ōs 足	foot 足	pes 足	pedal ペダル
*ph ₂ t'ēr 父	father 父	pater 父	paternal 父の,父方の
*tréyes; *tri- 3	three 3	tres 3	triangle 三角形
*ters- かわいた	thirst のどのかわき	terra 土地	territory 領地
*k̑mtóm 100	hundred 100	centum 100	century 世紀
*kwō イヌ	hound 猟犬	canis イヌ	canine イヌの

言語の比較と言語の系統

- 複数の言語があったとき、**基礎語彙**の**規則的**な音対応を調べることで、共通の先祖から分岐したことを示せる

注意

- 借用語は証拠にはならない
 - 「ケーキ」とcake、「ボタン」とbutton、「アイフォーン」とiPhoneなどが似ているので日本語と英語は同一起源！
- 偶然似ているものは必ずあるので、規則性なく「なんとなく似ているもの」をいくら並べても証拠にはならない
 - 「名前」とname、「道路」とroad、「すいすい」とswimなど、なんとなく似てるので日本語と英語は同一起源！

日本語と宮古語の比較

日本語	琉球宮古語(平良方言)
頭 atama	kanamaŋ
顔 kao	mipana
目 me	mii
鼻 hana	pana
耳 mimi	mim
口 kuti	futŋ
手 te	tii
足 asi	pagŋ

日本語と韓国語は同系か？

日本語	韓国語
高速道路	고속도로
図書館	도서관
二酸化炭素	이산화탄소
微妙な三角関係	미묘한 삼각관계

日本語と韓国語の比較

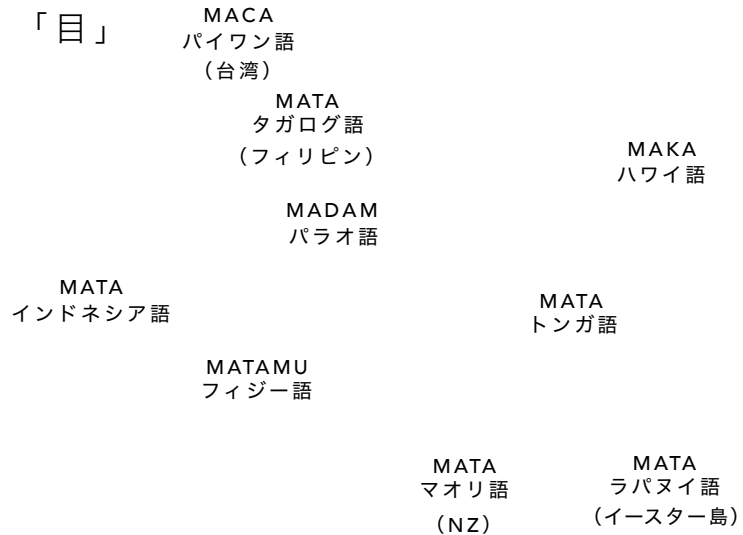
日本語	韓国語
頭 atama	머리 meli
顔 kao	얼굴 elkwul
目 me	눈 nwun
鼻 hana	코 kho
耳 mimi	귀 kwi
口 kuti	입 ip
手 te	손 son
足 asi	발 pal

語族

- 歴史的な系統関係が証明された言語の集まりを**語族** (language family) という
 - 語族は人間ではなく言語の集まり。
 - 民族と関係があるとは限らない。

語族

オーストロネシア語族の場合



音韻変化とアナロジー

音韻変化とアナロジー

- 「音韻変化」と「アナロジー」の2つの組み合わせで言語は変化していく
- Sturtevant の逆説
 - 音韻変化は単語を問わず**規則的に働き**、その結果**不規則が生じる**。
 - アナロジーは特定の単語に**不規則に働き**、その結果**規則性を生じさせる**。

規則的な音韻変化が生む不規則性

consul (古代ローマ執政官)		flos (花)	
主格	consul	主格	flos
対格	consul-em	対格	flor-em
属格	consul-is	属格	flor-is
与格	consul-i	与格	flor-i
奪格	consul-e	奪格	flor-e

- 母音間で $s > r$ という規則的な変化の結果
- cf. *justice* vs. *jury*, *rustic* vs. *rural*

アナロジー

- *dance : danced = sow : ?*
- *sow : sowed*
- かつて *sow* の過去形は不規則 (*seow*) であった
- cf. *know : knew*
- 音韻変化と異なり、しばしば単語ごとに不規則に起こる
- その結果、体系の規則性が増す

アナロジー

- 読む : 読むとき = 死ぬ : ?
- 死ぬ : 死ぬとき
 - 古典日本語では「死ぬるとき」（ナ行変格活用）
- ある : あるとき
 - 古典日本語では「あり」（ラ行変格活用）

文法化と文法の起源

文法化とは

- フランス語

chanter 歌う 未来時制

	単	複
1	chanterai	chanterons
2	chanteras	chanterez
3	chantera	chanteront

avoir 持つ 現在時制

	単	複
1	ai	avons
2	as	avez
3	a	ont

文法化

- もともと具体的な内容を持っていた語が
 - 意味が抽象化され文法機能を担うようになる
 - 形が単純になり、しばしば接辞化する
 - 使用頻度が増す

文法化

- *be gonna* < *be going to* < *go* 「行く」
- -ていく < ゆく 「行く」
- -ている < ゐる 「座る」
- back 「後ろ < 背中」、front 「前 < ひたい」
- -へ < へ 「あたり、ほとり」
 - cf. 行方 (ゆくへ)、前 (まへ) < 目方 (まへ)

ひょっとしたら

- すべての文法形態素は文法化の結果である

コメントシート

日本語	琉球宮古語
黒	ffu
枕	maffa
来間 (くりま) (島の名前)	ffima
子供	ffa

- この表から推測できる、琉球宮古語で生じた音韻変化は何でしょうか？ (2つあります)
- その他感想・コメントをお願いします